

プレイリーダーのいる子どもの遊び場に対する ニーズと評価

—「プレイスクール」における調査事例—

梶木典子, 瀬渡章子*, 田中智子*

(奈良女子大学大学院人間文化研究科, *奈良女子大学生生活環境学部)

原稿受付平成11年9月2日; 原稿受理平成12年3月29日

A Study on Parents' Needs and Evaluation of a Play Space for Children with Play Leaders

—A Case Study of "Play-School" —

Noriko KAJIKI, Akiko SETO* and Tomoko TANAKA*

Graduate School of Human Culture, Nara Women's University, Nara 630-8506

** Faculty of Human Life and Environment, Nara Women's University, Nara 630-8506*

This study aims (1) to clarify needs for children's play space with play leaders as well as the actual use and evaluation of users, and (2) to consider how the children's play space in future should be. The authors selected "Play-School" operated by the Play-School Foundation. The findings of our research based on the results of the questionnaire sent to and collected from parents at the Play-School are as follows:

1) The parents who were not satisfied with neighborhood play space and worried about children's play itself sent their children to the Play-School.

2) The respondents state that they chose the Play-School mainly because of the contents of play as well as the presence of play leaders; they highly evaluated the play activities offered by the Play-School and the quality of their children's play mate.

3) Most of the respondents regard the play leaders as their children's senior play mates, or seniors who are tasked to teach a lot of things other than play. In other words, the parents appreciate their presence.

4) Many of the parents hope that the children's play space is located within an area of their children's daily activities and easily available free of charge.

(Received September 2, 1999; Accepted in revised form March 29, 2000)

Keywords: children 子ども, play 遊び, play space 遊び場, play leader プレイリーダー, adventure playground 冒険遊び場.

1. 緒言

子ども^{*1}にとって「遊び」は、身体的、精神のおよび社会的な成長発達上欠かすことのできない重要な役割を担っている。本来、子どもの遊びは、子どもたちにより自然発生的に展開されていくものである。しか

し、今日では、子どもの遊び空間・遊び仲間・遊び時間が減少し、遊び方法を知らない子どもが増加しているため、地域における子どもの自然発生的な遊びは失われつつあり、遊べない子どもが増えている。また、地域における子どもの遊び場の代表ともいえる公園は、人工的に整備されたスペースが大部分を占めるうえ、禁止事項が多く、子どもが自由に遊べる場所とはなっていない。さらに、子どもを狙った凶悪な犯罪も増加

*1 本研究では、自発的にひとりで屋外遊びができる年齢に到達し、その遊び行動が地域に限定されることの多い小学生を「子ども」として取り扱う。

表1. 調査対象の概要

	雑創の森プレイス쿨 (1996年11月現在)	福岡プレイス쿨 (1997年11月現在)
活動母体	財団法人 プレイス쿨協会	
立地	郊外	都心
開設年	1977年	1976年
所在地	京都府京田辺市大住	福岡市中央区今泉
周辺環境	大阪や京都のベッドタウンとして開発された郊外住宅地に隣接し、森や池など豊かな自然に囲まれている	商業・業務集積地区である天神に隣接し、周辺は車の交通量が多く密集した中高層集合住宅に囲まれている
会員数	115名	45名
会費	8,000円/月	8,000円/月
曜日・時間	土曜日 14:00~17:00	土曜日 14:00~17:00 水曜日 15:30~18:00
プレイリ-ダ-	常勤4人, ボランテイ-数名	常勤3人, アルバイト2名
活動単位	各クラブに分かれて活動	水曜日は自由遊び, 土曜日は各クラブに分かれて活動
活動内容	崖にロープ・ネットを張り基地作り、手づくりいかだで魚釣り、水晶探し、竹とんぼ作り、メンコ作りとメンコ遊び、草木染め、紙すき、電磁石作り、巨大シャボン玉作り、ドッジボール等	公園でキックベースボール・ドッジボール・なわとび・宝探し、市民プール・児童会館へ行く、スライム作り、折り紙、ビー玉、ビーズ工作、リリアン編み、電気工作、ラジオ工作、木工作、パン作り等
特別活動 (日曜日や長期 休暇中に実施)	キャンプ、ナイトハイク、サイクリング、スキーツアー、木津川いかだ下り、凧上げ等	キャンプ、サイクリング、スキーツアー、人形劇場、もちつき、子ども市等
その他	幼児クラス(4, 5歳)あり 幼稚園が併設されている	乳幼児(2~5歳)クラスあり 屋外遊び場として借地していた隣地が売却され、屋外遊び場はほとんど残されていない

しており、子どもが屋外で遊ぶのも不自由な状況になってきている。このように、今日の子どもを取り巻く様々な状況を見てみると、現在、必要とされている子どもの遊び場とは、従来のように単に施設を整備しただけの遊び場ではなく、積極的に大人が関わり、遊びの面白さを伝えていくことによって、本来の遊びを回復していくことを目指すものでなければならない。

本研究では、これからの子どもの遊び場のあり方として、「大人がプレイリ-ダ-として常駐し、遊びに関わり・見守ること」が重要であると考え、「プレイリ-ダ-」の一般的な定義はないが¹¹⁾²⁾、本研究では、単なる子どもの「遊ばせ屋」ではなく、その役割を「子どもの遊び心を刺激する環境をつくり、安全を管理し、ケガなどの事態に対応し、遊び場に地域の大人を引き寄せること」であると位置付ける。

プレイリ-ダ-のいる子どもの遊び場は、デンマークにおいて「廃材遊び場」として始められたのをきっかけに、その後、「冒険遊び場」と呼ばれ世界各地に広がりを見せた³⁾。日本では、1970年代半ば頃から、住民と行政の協同運営によるプレーパーク(羽根木・世田谷・駒沢はらっぱ)や、財団法人の運営によるプレイス쿨(福岡・京都・国分寺)などが開設され、

近年、徐々に各地に広がりを見せている。

本研究は、研究対象として「専任の常勤プレイリ-ダ-」が配置され、「20年以上前からプレイリ-ダ-のいる遊び場として活動を続け、先駆的存在」であるプレイス쿨を選び、プレイリ-ダ-のいる子どもの遊び場の利用実態および保護者のニーズと評価を通して、プレイス쿨の成立要件を明らかにするとともに、プレイリ-ダ-のいる子どもの遊び場の今後のあり方について検討することを目的としている。

子どもの遊び場に関する空間計画系の研究は、これまで数多くなされている⁴⁾。例えば、仙田等^{5)~7)}は、遊び時間・仲間・空間・方法の4要素について、全国で遊び場環境の実態調査を継続的に行い、遊び環境の悪化が量的変化と質的变化の二側面で行っていることを指摘している。しかし、本研究の主題であるプレイリ-ダ-のいる遊び場に関する研究についていえば、研究対象となる遊び場が少数であるため、その既往研究も少ない。そのなかでも、長山⁸⁾⁹⁾は、羽根木プレーパークにおける子どもの行動軌跡を通して、遊具やプレイリ-ダ-の重要性を明らかにしているが、利用者の評価やプレイリ-ダ-の役割については言及していない。また、児童館も指導員(プレイリ-ダ-)が常駐する遊び場とみなすことができるが、児童館を対象とした既往研究は、施設の使われ方¹⁰⁾¹¹⁾、利用者の誘致圏を言及するもの¹²⁾¹³⁾が中心で、指導員(プレイリ-ダ-)の役割に注目した研究はみられない。

2. 調査方法

(1) 調査対象の概要

本研究では、財団法人プレイス쿨協会が運営する2カ所の会員制プレイス쿨を調査の対象とした。(財)プレイス쿨協会は、1976年に専任のプレイリ-ダ-を配した子どもの遊び場を開設し、1981年に財団法人として認可され、子どもの遊び環境づくりに先駆的に取り組んでいる団体である。その主要な業務は、遊び場の運営、機関誌の発行、プレイリ-ダ-の資格認定、各地の遊び場との情報交換等である。

調査の対象は、大都市郊外に立地する「雑創の森プレイス쿨」(以下[雑創]と記す)と、都心に立地する「福岡プレイス쿨」(以下[福岡]と記す)である(表1)。

郊外に立地する[雑創]は、深い谷川に傾斜する自然豊かな丘陵地に位置する。周辺は大阪や京都の都心部のベッドタウンとして30年ほど前から宅地開発が

プレイリーダーのいる子どもの遊び場に対するニーズと評価

進む地域である。活動は、森を利用した冒険遊びや基地遊び、併設の工房でのモノづくり等を、各クラブに分かれて行っている。活動回数は週1回、土曜日である。

都心に立地する〔福岡〕は、天神地区に隣接する商業・業務施設集積地に位置する。周辺は自動車交通量が多く、中高層集合住宅が密集している。プレイスクールの建物や屋外遊び場が狭いため、近隣の公共施設や公園、海等に遊びのフィールドを広げて活動することも多い。また、けんだまや九州地方のこま遊びを活動に取り入れ、伝承遊びにも力を注いでいる。活動回数は週2回で、水曜日は自由遊び、土曜日は各クラブに分かれて活動している。

プレイスクールの活動は、プレイリーダーがその日の遊びのメニューを子どもに提案するが、子どもに押しつけるのではなく、子どもの自主性と創造性を尊重し、子どもの意見を積極的に取り入れている。また、遊びの流れにより途中で遊びが大幅に変更されることも少なくない。

プレイスクールにおいて子どもに人気のある遊びの例をあげてみる（子どもへのヒアリング結果より*²）。〔雑創〕では、キャンプ、モノづくり、森での冒険、火を使った遊び（おやつづくり、煙ばくだん等）、基地づくり、色々な所へ行くこと（水晶掘りや釣り、街探検等）、大勢の友だちと遊ぶこと等、森という自然環境をいかした活動や工房を利用した活動に人気がある。〔福岡〕では、工作、お出かけ（周辺の公園、図書館、児童館等に遊びに行くこと）、ドッジボール、野球、料理、友だちと遊ぶこと・おしゃべりすること等、集団遊びや、家ではできないような遊びに人気がある。いずれのプレイスクールでも、道具工具類が自由に使えるので、低学年の子どもでも刃物の使い方を習得し、いろいろな刃物が使えるようになる。また、

*² 各プレイスクール小学生会員のなかから無作為に回答者を選び、調査員が調査シートの質問項目に従いヒアリングを実施¹⁴⁾。〔雑創〕：回答率51.3%（回答者数59人/全会員数115人）、実施日：1996.11/30, 12/7。〔福岡〕：回答率62.2%（回答者数28人/全会員数45人）、実施日：1997.10/15, 10/18。質問項目：属性、入会理由、プレイスクールの楽しいところ、プレイスクールでしかできないこと、プレイリーダーはどんな人、プレイスクールを休みたいとき、プレイスクールはどんなところ、プレイスクール・学校・家での自分像、放課後の遊び（場所、遊び相手、遊び仲間）、自然体験等。

表2. 調査方法の概要

調査名	保護者対象アンケート調査	
	〔雑創〕	〔福岡〕
調査対象	[雑創]	[福岡]
調査期間	1996年 11/28(金)～12/10(火)	1997年 11/20(木)～11/30(日)
調査対象者	母親または母親にあたる人	
調査方法	アンケート用紙留置自記法、郵送配布・回収	
配布数 ^{1) 2)} :a	94票	37票
回収数:b	69票	23票
未回収数:a-b	25票	14票
総回収率:a/b	73.4%	62.2%

- 1) きょうだいプレイスクールに在籍している世帯もあるので、配布数は全小学生会員数〔雑創〕115人、〔福岡〕45人より少ない。
2) きょうだい世帯の場合、子どもに関する質問は、〔雑創〕：年長児、〔福岡〕：年少児について回答してもらった。

火を使った活動が頻繁になされるため、火の扱い方も上手になる。このように、遊びを通して豊かな経験を積めることが、プレイスクールの活動の特徴である。

(2) 調査方法の概要

プレイスクールを利用している小学生の保護者を対象として、アンケート調査を実施した。調査の概要は表2のとおりである。調査期間は〔雑創〕1996年11月、〔福岡〕1997年11月、回収数は〔雑創〕69票、〔福岡〕23票である。

なお、本調査に先立ち、子どもへのヒアリング*^{2, 14)}、プレイリーダーへのヒアリング*³、プレイスクールの活動観察*⁴を実施した。

3. 結果および考察

(1) 回答世帯の概要

① 基本属性

調査回答世帯の基本属性は表3のとおりである。対象とした児童の学年は、「低学年」が〔雑創〕58%、〔福岡〕87%で、性別は両者とも「男子」が若干多い。母親の有職率は、〔雑創〕26%、〔福岡〕35%である。家族型は、両者とも「核家族」が大半を占める。住宅形式では、〔雑創〕は「1戸建て(73%)」が多く、〔福岡〕は「集合住宅(83%)」が圧倒的に多い。

*³ 主任プレイリーダーを対象に、ヒアリングを実施。実施日：〔雑創〕1996.6/7, 〔福岡〕1997.7/2。質問項目：設立経緯、活動の方針、活動内容、プレイリーダーの子どもへの関わり方、会員の特徵、地域の様子等。

*⁴ 調査員がプレイリーダーとしてプレイスクールの活動に加わり、子どもたちの遊びの様子を観察。実施日：〔雑創〕1996.10/5・12・19・26・27, 計5日、〔福岡〕1997.7/2・5, 10/15・18, 計4日。

表3. 回答世帯の基本属性

		[雑創] N=69		[福岡] N=23	
対象学 年	低学年	58%		87%	
	高学年	42%		13%	
性 別	男子	64%		65%	
	女子	36%		35%	
年 齢	(平均値)	40.7歳	44.2歳	39.8歳	41.7歳
	職業	母親 N=69	父親 N=69	母親 N=23	父親 N=21 ¹⁾
両親職業	有職	26%	98%	35%	100%
	会社員・公務員	1%	80%	4%	76%
	自営・自由業	4%	12%	9%	24%
	パート	3%	0%	17%	0%
	内職	12%	0%	0%	0%
	その他	6%	6%	4%	0%
無職	59%	0%	65%	0%	
不明	15%	3%	0%	0%	
家族構成	家族型	核家族		84%	
		世代家族		15%	
		不明		1%	
家族人数	(平均値)	4.4人		3.9人	
子ども人数	(平均値)	2.2人		1.8人	
住宅形式	1戸建て	73%		17%	
	集合住宅	23%		83%	
	不明	4%		0%	

1) [福岡]では父親不在世帯があるため、父親はN=21である

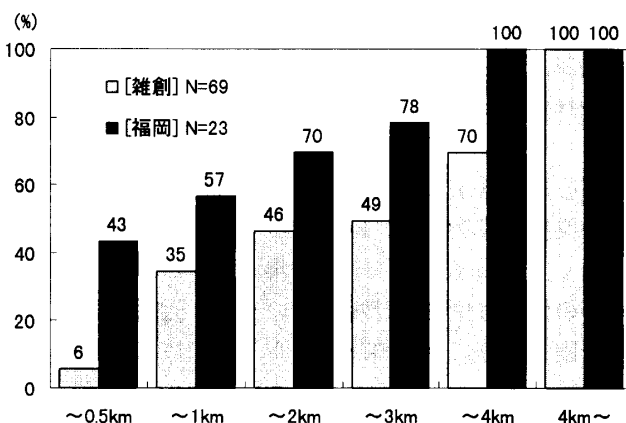
② 居住地分布

利用者の自宅を地図上にプロットするとともに、自宅からプレイスクールまでの直線距離を算出した。自宅からプレイスクールまでの平均直線距離を累積比率で表したものが図1である。

居住地の分布は、[雑創]が[福岡]よりも広域である。[雑創]は1km圏内が35%、2km圏内は46%を占めるが、4km圏外も30%と高い割合を占めている。隣接する新興住宅地に居住する子どももいれば、遠くは10km以上離れた奈良市や京都市に居住する子どももみられ、最も遠い子どもは14km離れたところに居住している。プレイリーダーの話によると、隣接の新興住宅地では世帯の高齢化に伴い少子化が進んでいるため、年々、遠方から通う子どもの割合が増加しているということである。一方、[福岡]は、1km圏内が57%で、特に500m圏内が43%を占めており、回答者の子どもは全員4km圏内に居住している。[福岡]は、周辺に高密度な集合住宅が多いこと、週2回の活動に参加が可能など等が要因となり、比較的近隣に居住する子どもの割合が高くなっていると考えられる。

(2) 放課後の子どもの遊び状況

次に、プレイスクールを利用する子どもの、放課後



平均値： [雑創] 3.3km, (低学年 4.1km, 高学年 2.1km)

[福岡] 1.4km, (低学年 1.4km, 高学年 1.3km)

図1. 自宅からプレイスクールまでの直線距離 (累積比率)

表4. 塾・おけいこ事への参加状況

単位：% (実数)		
	[雑創]	[福岡]
参加 ¹⁾	82 (56)	96 (22)
1回/週	25 (17)	30 (7)
2回/週	19 (13)	26 (6)
3回/週	22 (15)	26 (6)
4回/週	9 (6)	13 (3)
5回/週	7 (5)	0 (0)
不参加	17 (12)	4 (1)
不明	1 (1)	0 (0)
合計	100 (69)	100 (23)
平均回数 ²⁾	2.5回	2.2回

1) プレイスクールへの参加を除く

2) 参加と回答した者のみの平均回数

の遊びの現状についてみておきたい。以下で取り上げる①塾・おけいこ事への参加状況によって遊び時間の現状を、②居住地周辺の遊び場に対する不満によって遊び空間の現状を、③最近の子どもの遊びに対する意見によって遊びの状況をうかがい知る助けになると考えられる。

① 塾・おけいこ事への参加状況

塾やおけいこ事に参加している割合は、[雑創]82% [福岡]96%である(表4)。1週間の参加回数の平均は、[雑創]2.5回、[福岡]2.2回である(参加者のみ)。[福岡]は、プレイスクールの活動が週2回あるため、他のおけいこ事や塾への参加が[雑創]より少なくなっていると考えられる。また、「週4~5回」という回答もみられ、多忙な子どもの様子がうかがえる。

② 居住地周辺の遊び場に対する不満

居住地周辺の遊び場に対する不満を表5に示す。

プレイリーダーのいる子どもの遊び場に対するニーズと評価

表5. 居住地周辺の遊び場に対する不満

不明を除く, 単位: % (実数)			
	[雑創] N=67	[福岡] N=22	χ^2 検定
特に不満はない	22 (15)	0 (0)	*
不満あり	78 (52)	100 (22)	
不満の内容 (複数回答)	N=52	N=22	
自然のままの遊び場がない	69 (36)	68 (15)	
近所に子どもの遊び場がない	35 (18)	64 (14)	**
遊び場に友だちがいない	44 (23)	18 (4)	
子どもを見守る大人が遊び場にいない	29 (15)	23 (5)	
遊び場が狭い	29 (15)	23 (5)	
面白い遊具がない	29 (15)	9 (2)	
遊びに関する規制が多い	29 (15)	5 (1)	
周辺に車が多く危険である*	-	96 (21)	-
雨の日に遊ぶ場所がない*	-	46 (10)	-
不審者がいる*	-	46 (10)	-
死角が多い*	-	32 (7)	-
中高生のたまり場になっている*	-	9 (2)	-
整備されていない*	-	5 (1)	-
その他	6 (3)	9 (2)	

[雑創]と[福岡]のクロスにおいて χ^2 検定: * $p<0.05$, ** $p<0.01$

※:[福岡]のみに質問した項目

表6. 最近の子どもの遊びに対する自由意見

(複数回答)	
[雑創]	<ul style="list-style-type: none"> ○遊びが受動的, 自主的に遊べない, 遊びを考え出せない(15) ○テレビゲームのような室内遊びが多い(13) ○あまり外遊びをしない(13) ○異年齢で遊ばない(11) ○外で遊べる空間が減っている(9) ○約束しないと遊べない, 電話を使って約束する(8) ○体を使った遊びをしない(7) ○遊び時間が少ない(6) ○多人数で遊ばない(6) ○お金のかかる遊びをすること(5) ○同じ部屋に集まっても, パラパラに遊んでいたりすることが多く, 本を読んでいる子, ゲームをしている子等, たくさんのなかの1人で遊ぶ(5) ○スケジュールを調整しながら遊ぶ(5) ○遊びが長続きしない(2) ○人を傷つけるような言葉を平気で言う(1) ○けがをこわがる(1) ○汚れる遊びをいやがる(1)
[福岡]	<ul style="list-style-type: none"> ○遊ぶ時間がない(6) ○外は危険が多く(車, 犯罪, 不審者)遊ばせられない(5) ○室内でテレビゲームをすることが多い(3) ○遊ばせようと思うと親がわざわざ公園まで連れていけないといけない(3) ○遊び場がない(3) ○遊ぶ友だちがいない(3) ○公園では子どもが安心して, 自由に遊べない(2)

[雑創]:69世帯中59世帯回答, [福岡]:23世帯中16世帯回答
()内の数字は回答数を示す:類似する回答をまとめたもの

「特に不満を感じない」という回答は, [雑創]では22%であるが, 都心立地の [福岡] では0%で, すべての回答者が居住地周辺の遊び場に対し何らかの不満を持っていることがわかる ($p<0.05$).

不満の内容をプレイスクール別にみると, [雑創]

表7. 入会理由

複数回答, 単位: % (実数)				
	[雑創] N=69	[福岡] N=23	χ^2 検定	
積極	86 (59)	83 (19)		
理由	64 (44)	83 (19)	**	
理由	91 (63)	39 (9)	**	
理由	44 (30)	70 (16)	**	
理由	48 (33)	52 (12)		
理由	42 (29)	26 (6)		
消極	20 (14)	52 (12)	*	
理由	10 (7)	39 (9)		
理由	13 (9)	17 (4)		
理由	10 (7)	13 (3)		
理由	4 (3)	13 (3)		
理由	0 (0)	4 (1)		
その他	10 (7)	17 (4)		
その他	9 (6)	13 (3)		
その他	1 (1)	13 (3)		

[雑創]と[福岡]のクロスにおいて χ^2 検定: * $p<0.05$, ** $p<0.01$

は多い順に, 「自然のままの遊び場がない (69%)」「遊び場に友だちがいない (44%)」「近所に子どもの遊び場がない (35%)」である。[福岡] は, 「周辺に車が多く危険である (96%)」が圧倒的に多く, 「自然のままの遊び場がない (68%)」「近所に子どもの遊び場がない (64%)」と続いている。また, 「その他」の自由回答として「公園が外から見えにくいいため, 危険を感じる」という, 防犯面の不満もあげられている。

③ 最近の子どもの遊びに対する意見

プレイスクールを利用している子どもの保護者は, 最近の子どもの遊びをどのように感じているのか自由意見を求めた (表6)。[雑創] 69世帯中59世帯, [福岡] 23世帯中16世帯から回答が得られた。

プレイスクール別にみると, [雑創] では, 「遊びが受動的, 自主的に遊べない, 遊びを考え出せない」「テレビゲームのような室内遊びが多い」「あまり外遊びをしない」「異年齢で遊ばない」「約束をしないと遊べない」等, 現在の子どもの遊び方法に対し不安を示す意見が目立つ。[福岡] では, 「外は危険が多く(車, 犯罪, 不審者)遊ばせられない」「遊ばせようと思うと親がわざわざ公園まで連れていけないといけない」「遊び場がない」「公園では子どもが安心して自由に遊べない」等, 遊び場・空間に対する不安を示す意見が多くみられる。

(3) 入会理由

プレイスクールへの入会を決めた理由を [積極的理由] [消極的理由] [その他] に分類し, 表7に示す。

両プレイスクールで半数以上が, 活動内容に関連する「楽しそう(面白そう)だから」「色々な遊びを教

表 8. 活動への参加状況

[雑創] N=68		[福岡] N=23	
参加回数	% (実数)	参加回数	% (実数)
4回/月	56 (38)	7~8回/月	43 (10)
3回/月	29 (20)	5~6回/月	22 (5)
2回/月	10 (7)	3~4回/月	30 (7)
1回/月	3 (2)	1~2回/月	4 (1)
その他	1 (1)	—	—
活動回数：4回/月		活動回数：8回/月	

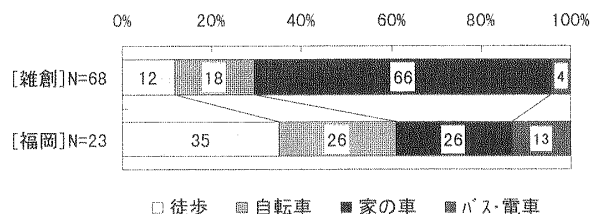


図 2. 自宅からプレイスクールまでの交通手段

えてくれるから」という項目を入会理由としてあげており、活動内容は入会を決定付ける重要な要因であると考えられる。また、「プレイリーダーがいて、安心だから」というプレイスクールの特徴を入会理由としてあげる回答も多い。

プレイスクール別に入会理由をみると、[雑創]では、全体的に「積極的理由」が多い。特に「自然のなかで思いきり遊べるから (91%)」($p < 0.01$)は、回答率ももっとも高く、自然に恵まれた森の中という立地が非常に魅力的であることがわかる。

一方、[福岡]では、「遊ぶ時間を持たせたいから (70%)」($p < 0.01$)や「色々な遊びを教えてくれるから (83%)」($p < 0.01$)という「積極的理由」とともに、「近所に遊び場がないから (52%)」($p < 0.05$)という「消極的理由」があげられている。これは、遊び場の少ない都心に居住する子どもに、できるだけ多くの遊びの機会と安心できる遊び環境を与えたいという[福岡]の特徴ともいえる。

(4) プレイスクールの利用状況

次に、プレイスクールの利用状況を明らかにするため、活動への参加状況、来所の際に利用する交通手段、来所に要する時間により分析する。

① 参加状況

活動回数は、[雑創]が週1回：土曜日、[福岡]は週2回：水・土曜日である。1カ月あたりの活動への参加状況を表8に示す。両プレイスクールとも「毎回」([雑創]：4回、[福岡]：7~8回)という回答が多い。

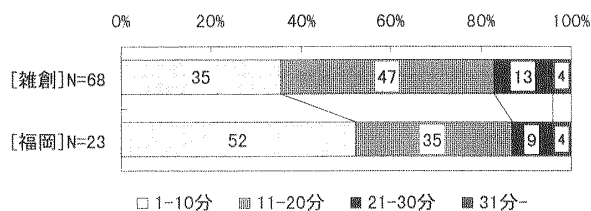


図 3. 自宅からプレイスクールまでの所要時間

表 9. プレイスクールまでの直線距離・所要時間 (交通手段別)

	[雑創] N=68		[福岡] N=23	
	直線距離	所要時間	直線距離	所要時間
全体	3.2km	17.4分	1.4km	14.3分
徒歩	0.6km	13.1分	0.5km	12.6分
自転車	1.1km	15.0分	1.1km	13.3分
家の車	4.0km	16.6分	2.7km	14.7分
バス・電車	7.7km	50.0分	1.6km	20.0分

直線距離、所要時間とも平均値を示す

② 交通手段

自宅からプレイスクールまで、もっともよく利用する交通手段は図2のとおりである。[雑創]は、「家の車 (66%)」がもっとも多く、親の送り迎えにより来所している子どもが多いことが特徴である。これは、遠方に居住する子どもが多いこと、起伏のある森の中に位置すること等が要因として考えられる。[福岡]は「徒歩 (35%)」「自転車 (26%)」による来所が多く、これらの子どもは、近隣に居住しているため、「ひとりで」あるいは「友だちと一緒に」来所している場合がほとんどである。しかし、都心地区にあるため、「ひとりで」来所させるには、交通量の多さが危険であると指摘する意見もある。

③ 所要時間

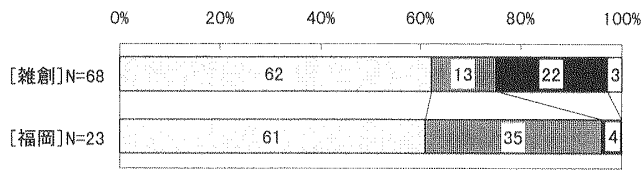
自宅からプレイスクールまでの所要時間は、両プレイスクールともに約80%が「20分以内」と回答している(図3)。平均所要時間は[雑創]17.4分、[福岡]14.3分である(表9)。[福岡]では52%が「10分以内」と回答しており、「徒歩・自転車」による来所に限ると、8割近くが「10分以内」と回答している。[雑創]の「バス・電車」利用者には、片道1時間近くを要している子どももみられ、往復の所要時間を考え合わせると、このような子どもたちにとって、来所に要する時間は大きな負担になっていると考えられる。

(5) プレイスクールに対する評価

1) 運営に対する評価

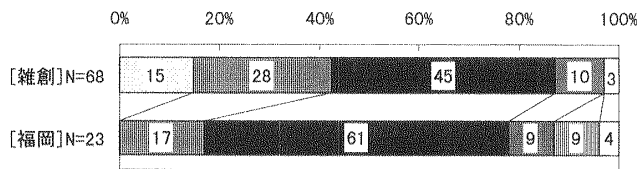
プレイスクールは会員制で運営されており、会費は、[雑創][福岡]のいずれも8,000円/月である。運営

プレイリーダーのいる子どもの遊び場に対するニーズと評価



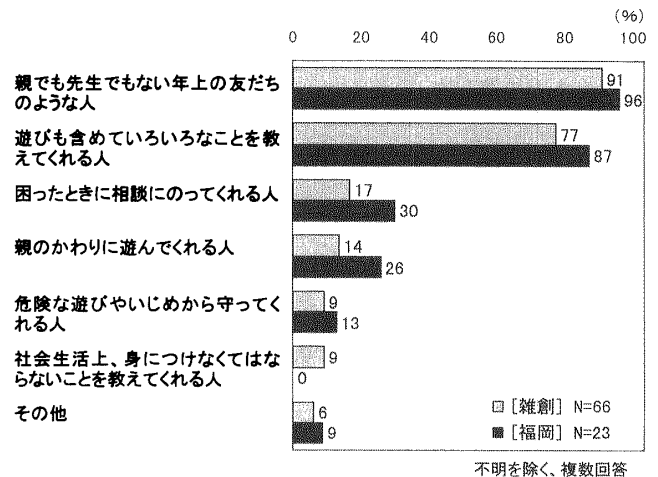
□今のままでよい ■好きなときに行ける方がよい ■その他 □不明

図4. 活動回数に対する評価



□かなり高い ■高い ■やや高い ■ちょうどよい ■安い □不明

図5. 会費に対する評価



不明を除く、複数回答

図6. プレイリーダーの役割

に対して、保護者はどのように評価しているのかを明らかにするため、①活動回数、②会費に対する評価により分析する。

① 活動回数

活動回数に対する評価は図4のとおりである。両プレイスクールともに約60%が「今のままでよい」と現状を肯定している。「好きなときに行ける方がよい」という項目に対しては、[福岡]が35%で、[雑創]の13%に比べると回答が多い。これは、[福岡]の場合、比較的近隣に住んでいる子どもが多く、子どもが一人で行ける距離にプレイスクールが位置しているが、[雑創]は遠方に住み、親による車での送り迎えが必要な子どもが多いことに起因していると考えられる。[雑創]の「その他」には、「理想は毎日開放され、子どもの好きなときに行ける遊び場となることであるが、家から遠い・送り迎えを毎回できない・下校時刻が遅く子どもに時間的余裕がないなどの距離や時間の障害要因のある現状では、週1回以上の活動参加は無理である」という意見が複数みられる。

② 会費

会費に対する評価は図5のとおりである。会費は、1週間の活動回数が異なるため、1回あたり[雑創]2,000円、[福岡]1,000円である。単価の高い[雑創]では「かなり高い」「高い」という評価が多く、[福岡]でも「やや高い」を加えると8割近くが高いと評価している。子どもの遊びに会費を払うこと自体に不自然さを感じる回答者も少なくない。しかし、「高い」と感じる会費を払ってでも多くの親はこのような遊び場を求めているといえる。

2) プレイリーダーに対する評価

プレイスクールの大きな特徴は、専任のプレイリーダーが常駐していることである。「プレイリーダー(play leader)」は直訳すると「遊びの指導者」となり、子どもに遊びを教え指導する人の意味になる。しかし、これはヨーロッパで使われていた言葉をそのまま直輸入したもので、プレイリーダーの役割を適切に表現しているとは言い難い。

そこで、プレイスクールでは、プレイリーダーは子どもにとってどのような存在であり、どのような役割を果たしているのかを質問した(図6)。

両プレイスクールで最も回答の多かった項目は「親でも先生でもない、年上の友だちのような人」で、次いで「遊びも含めていろいろなことを教えてくれる人」である。プレイスクールでは、子どもたちはプレイリーダーのことを愛称で呼んでおり、そのことも先生というイメージを払拭し、学校の先生とは全く違う身近な存在として受け止めることに役立っていると考えられる。また、プレイスクールのプレイリーダーたちは、子どもを上から押さえつけたり、強制することなく、子どもと同じ位置に立って接しており、親がしてやれないような遊び(時間的な余裕のなさ、知識・方法の不十分さによる)を子どもに教えることも多い。そのため、プレイリーダーは、親・子のどちらにとっても非常に魅力的な頼もしい存在として評価されている。さらに、プレイリーダーへのヒアリングや活動の観察を通して明らかになったことは、子どもが求めるプレイリーダー像は多種多様であるため、性別、性格、得意分野等が異なるプレイリーダーが、複数存在していることが重要であるということである。複数の視線で

表 10. プレイリーダーに対する評価・要望

○：プラス評価 ●：要望 (複数回答)	
子どもとの接し方	
[雑創]	○親や学校の先生とは違う大人として接してくれる(7) ○子ども一人一人に配慮してくれる(7) ○子どもと同じ位置・視点・高さで接してくれる(6) ○子どもの持っている力を引き出してくれる(2) ○遊びのなかで体を使って子どもをリードしてくれる(2) ○子どもと距離を置き、強制はしない(2) ○子どもに忍耐強く付き合ってくれる(2) ●子どもがリーダーに頼りすぎないよう子どもたちに自主的な活動をさせて欲しい(3) ●もっと積極的に接して欲しい(1) ●精神面でも支えて欲しい(1)
[福岡]	○子どもの目線に立って、個人を尊重してくれる(6) ○子どもの気持ちをわかってくれる(2)
プレイリーダーとしての資質	
[雑創]	○自然のこと物作りのことをよく知っている(4) ○親の知らないことを子どもに伝えてくれる(3) ○遊びをたくさん知っている(2) ○なんでもよく知っている(2) ●理論(子どもの発達や心理等)を備えて欲しい(1) ●ボランティアリーダーの資質を向上させて欲しい(1)
[福岡]	○子どもの世界に心から入れる人が多い(2) ○手作りすることが上手(1) ○向上心がある(1)
親にとって・子どもにとっての存在	
[雑創]	○貴重な存在、大切な存在(9) ○子どもにとって親しみやすく信頼できる大人(8) ○親にとって頼もしい存在(7) ○子どもにとって大好きな遊び相手(5) ○親にとって安心できる存在(4) ○昔のガキ大将的存在(3) ●落ち着いた話のできる存在になって欲しい(1) ●もっと威厳のある存在になって欲しい(1) ●子どもたちの精神的支えになって欲しい(1)
[福岡]	○親も子も信頼できる存在(6) ○親にとって学校の先生とは違うよき相談相手(2) ○子どもにとって貴重な大人の友だち(1)
その他	
[雑創]	●お金を払わなくても近所にプレイリーダーがいて欲しい(2) ●プレイリーダーの社会的地位を認めて欲しい(2)
[福岡]	●親との交流をもっとして欲しい(3) ●自分の子どもの様子を聞かせて欲しい(2)
[雑創]: 69 世帯中 55 世帯回答, [福岡]: 23 世帯中 15 世帯回答 ()内の数字は回答数を示す。類似する回答をまとめたもの	

子どもの遊びを見守ることは、遊びの安全性を高めるためにも必要である。

プレイリーダーに対する評価を具体的に把握するため、「プレイリーダーに対する評価・要望」を自由記述方式で求めた(表 10)。「雑創」は対象世帯 69 世帯中 55 世帯から、「福岡」は 23 世帯中 15 世帯から回答が得られた。全体的にプレイリーダーの仕事・存在・子どもへの接し方に肯定的な捉え方をしている回答者が多い。プレイリーダーに対する評価として、「親とも学校の先生とも違う存在のプレイリーダーは、母親

にとっては信頼できる頼もしい存在であり、子どもたちを個性に応じてうまくリードし、親にはできない遊びを教えてくれ、エネルギーに活動してくれている」という内容の意見が複数みられ、プレイリーダーに対して信頼と安心感を寄せている回答者が多いことがわかる。プレイリーダーに対する要望には、子どもとの接し方に関するものが多い。「子どもがリーダーに頼りすぎないように子どもたちに自主的な活動をさせて欲しい」という意見もあれば、それとは逆に「もっと積極的に関わらすべきだ」という意見もみられる。また、「精神面でも支えて欲しい」や、「落ち着いた話もできるようになって欲しい」という意見もある。その他の要望として、「お金を払わなくても近所にプレイリーダーがいて欲しい」「プレイリーダーの社会的地位を認めて欲しい」などがある。また、「福岡」では、親の送り迎えなしでひとりで来所する子どもが多いため、「親との交流をもっとして欲しい」「自分の子どもの様子を聞かせて欲しい」という保護者とプレイリーダーの交流を望む意見もみられる。

3) プレイスクールに対する評価

プレイスクールに対する全般的な評価を明らかにするため、図 7 に示す 25 項目について「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」のいずれであるかをたずねた。

1. 立地・遊び環境の各項目をみると、「豊かな自然環境の中で遊べてよい(『そう思う』の回答率:[雑創] 100%, [福岡] 9%, 以下同様の表記)」では、森の中に位置する「雑創」の評価が非常に高く、自然を活かした活動が評価されていることがわかる($p < 0.001$)。「子どもにとって居心地のよい場所となっている([雑創] 88%, [福岡] 91%)」では、立地の相違に関係なく両方で評価が高く、プレイスクールという遊び拠点、学校や家とは違った子どもの居心地のよい場所となっていることが評価されているといえる。また、「家から遠いので通うのが大変である([雑創] 28%, [福岡] 36%)」という項目では、「雑創」の 7 割近くの子どもの家が車で通っているにもかかわらず、「通うのが大変」に同意する人は少数であり、遠くても通わせたいという保護者の意識がうかがえる。

2. 遊び内容の項目では、いずれの項目も非常に高い評価を得ている。保護者から高く評価されているプレイスクールの遊びは、専任のプレイリーダーが常駐していることとともに、プレイスクールが専用の活動拠点を持っていることにより成立しているといえる。

プレイリーダーのいる子どもの遊び場に対するニーズと評価

	[雑創]		[福岡]		χ^2 検定				
	0%	50%	100%	0%	50%	100%			
1. 立地・遊び環境									
豊かな自然環境の中で遊べてよい	N=68	100	0	N=22	9	23	68	***	
建物デザインが子どもの遊び環境にふさわしい	N=68	81	13	4	N=23	5	26	17	*
子どもにとって居心地のよい場所となっている	N=68	88	12	0	N=23	9	9		
家から遠いので通うのが大変である	N=68	28	9	63	N=22	36	5	59	
子どもがひとりで通える場所にあつてよい	—			N=23	5	7	22	22	
2. 遊び内容									
変わった遊びや体験ができてよい	N=67	99	1	0	N=23	100			
モノ作りができてよい	N=67	93	3	3	N=23	100			
手作りの遊具で遊べてよい	N=66	94	2	2	N=23	100			
遊びに関する規制が少ないのでよい	N=67	94	1	1	N=23	91	2	4	
火遊び・探検などの大胆な遊びができてよい	N=67	93	3	4	N=23	100			
子どものしたい遊びが思いきりできてよい	N=67	93	1	1	N=23	91	4	4	
3. 遊び仲間									
異年齢の友だちと遊べてよい	N=67	97	1	1	N=23	91	4	4	
大勢の友だちと遊べてよい	N=67	87	12	1	N=23	87	13		
他の学校の友だちと遊べてよい	N=67	87	12	1	N=23	91	4	4	
会員制なので、気心の知れた友だちと遊べてよい	N=67	63	27	10	N=23	65	26	9	
プレイリーダーと遊べてよい	N=67	93	1	6	N=23	87	13		
4. 運営									
会員制なので義務的に子どもを行かせてしまう	N=67	22	22	55	N=23	17	4	78	
週に1回なので1度休むと行きづらい	N=67	4	6	90	—				
プレイリーダーが少ない	N=67	28	36	42	N=23	13	22	65	
5. 交流・子育て支援									
親が子どもから解放される	N=66	29	20	52	N=23	26	30	43	
親同志、子育てをする仲間ができてよい	N=66	41	24	35	N=23	35	17	48	
プレイリーダーに相談にのってもらえるのがよい	N=67	53	24	18	N=23	65	5	26	
親子で参加するイベントがあつて楽しい	N=67	64	25	10	N=23	65	9	26	
親同志の交流がもっとあつた方がよい	N=67	19	49	31	N=23	48	9	43	**
親とプレイリーダーの交流がもっとあつた方がよい	N=67	27	43	30	N=23	65	17	17	**
凡 例	■ そう思う ▨ どちらともいえない □ そう思わない								

[雑創]と[福岡]のクロスにおいて χ^2 検定: * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$, 不明を除く

図7. プレイスクールに対する評価

プレイスクールの専用の活動拠点では、遊びに関する禁止事項も少なく、子どもたちは遊びを阻害されることがなく、思い切りのびのびと遊ぶことができる。また、

「モノ作り」をする遊びでは、道具や材料の保管をすることができるため、1日では完成しない作品を次回まで保管できるなど、遊びに継続性を持たせることが

表 11. プレイリーダーのいる子どもの遊び場に対する自由意見

○：プラス評価 ●：要望 (複数回答)	
立地・遊び環境	
[雑創]	○森や川に恵まれた自然環境が非常に魅力的である(12) ●子どもが1人で通える範囲に、このような遊び場が増えることを望む(12)
[福岡]	●子どもが1人で歩いて行ける自宅の近くにこのような遊び場があればよい(4)
遊び内容	
[雑創]	○自然のなかで頭と体を使い思い切り遊べてよい(12) ○自然のなかでの遊びには危険が伴うが、リーダーが見守っているため、安心できる(7) ○日常ではできない遊びができるのがよい(6) ○親ではできない遊びをリーダーが提供してくれる(5)
[福岡]	○家庭では体験できないことをさせてもらえる(3) ○単なる遊び場ではなく精神的発達に良い場である(3) ○自由にとことん遊べる場である(1)
遊び仲間	
[雑創]	○リーダーの存在が貴重(8) ○異年齢で遊べるのがよい(3) ○いろいろな小学校の子と遊べるのがよい(1) ●ほんとはリーダーなしで異年齢の子が遊ぶ集団があってほしい(1) ●遠くから通う子が多いので、仲良くなっても週1回のつきあいでは少ない(1)
[福岡]	○リーダーの存在が貴重(2) ○色々なパターンの友だちを作ることができる(2) ●週2回では友だち同士のつきあいが密になれない(1)
その他	
[雑創]	●高い月謝を払ってプレイスクールで遊んでもらうことは、不自然で不思議な現象である(2)
[福岡]	○子どもが学校とも家ともちがう子どもにとって居心地のよい居場所を確保できるのがよい(5)
[雑創]: 69 世帯中 65 世帯回答, [福岡]: 23 世帯中 18 世帯回答 ()内の数字は回答数を示す: 類似する回答をまとめたもの	

できる。さらに、雨の日でも屋内活動ができるため、安定した活動を続けることができる。このようにプレイスクールの遊び内容は専用の遊び拠点に支えられているといえる。

3. 遊び仲間に関する項目も、ほとんどの項目で評価が高く、プレイリーダーと一緒に異年齢で集団遊びができることが高く評価されていることがわかる。しかし、「会員制なので、気心の知れた友だちと遊べてよい」([雑創] 63%, [福岡] 65%)という項目は、遊び仲間に関する他の項目よりも「そう思う」という回答がやや少ない。その要因のひとつとして、遊び仲間を会員という枠組みに限定してしまうことへ疑問を感じる保護者がいることが考えられる。

4. 運営の項目では、「会員制なので義務的に行かせてしまう」([雑創] 22%, [福岡] 17%)に「そう思う」と回答した人は少数ではあるが、会費を払っているから休ませずに行かせようとする保護者が少な

らず存在することがわかる。また、「プレイリーダーが少ない」([雑創] 28%, [福岡] 13%)という項目では、[雑創]の同意率が高い。これは、常勤プレイリーダー1人当たりの会員数が[雑創] 28.8人 [福岡] 15人と倍近く違うためと考えられる。

5. 交流・子育て支援の項目では、「プレイリーダーに相談にのってもらえるのがよい」([雑創] 58%, [福岡] 65%)、「親子で参加するイベントがあって楽しい」([雑創] 64%, [福岡] 65%)の項目が両者において評価されている。一方、「親とプレイリーダーの交流がもっとあった方がよい」([雑創] 27%, [福岡] 65%)、「親同志の交流がもっとあった方がよい」([雑創] 19%, [福岡] 48%)の2項目では、[福岡]の同意率が高い ($p < 0.01$)。これは、[福岡]は[雑創]に比べ、子どもの送り迎えをする親が少なく、親がプレイリーダーや他の親と接する機会も少ないので、交流の機会を増えることを望む親がいるためと考えられる。

4) プレイリーダーのいる遊び場に対する意見

前述のプレイスクールに対する評価項目とは別に、プレイリーダーのいる遊び場に対する評価を具体的に把握するため、「プレイスクールのようなプレイリーダーのいる遊び場に対してどう思うか(自由意見)」との質問をした(表11)。「雑創」69世帯中65世帯、「福岡」23世帯中18世帯から回答が得られた。「雑創」では、自然のなかで遊べること、プレイリーダーの存在により遊び内容が広がること、子どもが創造的に遊びを展開することを評価する意見が多くみられる。「福岡」では、プレイスクールが子どもたちにとって居心地のよい居場所になっているという意見がみられる。いずれのプレイスクールでもこのような遊び場がもっと身近に存在することを希望する意見が多い。一方で、会費を払って通わせることへ疑問を抱く意見や、回数に限られているために友だちとのつきあいが密になれないという意見もみられる。

4. 要 約

プレイリーダーのいる子どもの遊び場として、郊外に立地する「雑創の森プレイスクール」と、都心に立地する「福岡プレイスクール」において調査を行い、プレイリーダーのいる子どもの遊び場の利用実態、保護者のニーズ・評価について考察した。結果は以下のように要約される。

(1) プレイスクールへの入会を決めた理由は、最近の子どもの遊びについて、危機感・不安感を抱く保護

プレイリーダーのいる子どもの遊び場に対するニーズと評価

[雑創]・[福岡]共通

複数の専任プレイリーダーが常駐すること

- ①子どもの多様な要求に対応した活動が可能
- ②様々な遊びが経験できる（非日常の遊び、危険を伴う遊び等）
- ③子どもの遊びの安全性が確保される
- ④プレイリーダーと子ども・親の間に信頼関係ができる

専用の活動拠点があること

- ①子どもの遊びを阻害されない
- ②活動準備に使える
- ③道具や材料を保管できる
- ④雨の日にも使用できる

会費制・会員制であること

- ①財政的に安定している
- ②遊び仲間が確保できる

保護者の子どもの遊びに対する意識

- ①子どもの遊びについて危機感・不安感を抱いている

[雑創]

自然環境に恵まれた遊び空間

- ①森、谷、池など周囲の自然環境が遊びのフィールドになる
- ②手作り遊具が様々な遊びを誘発する
- ③変化に富んだ地形により遊びが広がる
- ④自然の素材（土、水、竹、野草、昆虫、魚）を容易にみつけることができる
- ⑤普段は規制されている場所（森、池等）へプレイリーダーと共にいくことができる
- ⑥非日常な遊び（火遊び、基地遊び等）を展開できる

会員世帯の特徴

- ①子どもを送迎が可能

[福岡]

安全な遊び場が少ない居住環境

- ①集合住宅居住者が多く、自宅周辺に屋外遊び場が少ない
- ②子どもが遊べる公園が少ない（整備状況が悪い、浮浪者がいる等）
- ③周辺の道路は交通量が多く、危険である

活動区域内の充実した公共施設群（体育館、児童館、図書館等）

- ①周辺の多くの公共施設を利用して活動を広げることができる

近隣に居住する会員が多いこと

- ①週2回の活動が可能
- ②子どもだけで通うことが可能

図8. [雑創]・[福岡] プレイスクールの成立要件

者が多いため、活動内容とともに、プレイリーダーの存在が重要視されていた。[雑創]では恵まれた自然環境にあるプレイスクールの立地が入会の大きな要因となっていたが、[福岡]では居住地域の遊び環境への不満から、子どもに遊び時間を積極的に持たせるために入会させるケースがみられた。

(2) [雑創]は[福岡]に比べ利用者の居住地が広域に分布していた。そのため、[雑創]は、保護者の車による送迎により来所する子どもが多いが、[福岡]は、比較的近隣に居住する子どもが多いため、子どもだけで、徒歩・自転車により来所する子どもが多かった。

(3) 活動回数に関する評価では、いつでも自由に遊びに行けることを理想としながらも、学校からの帰宅時刻が遅いこと、塾・おけいこ事への参加、送り迎えが必要であることなどの要因により、現状を肯定する評価が多かった。また、会費を「高い」と感じながらも、子どもを通わせる保護者が多いことが明らかになった。

(4) プレイリーダーを「親でも先生でもない、年上

の友だちのような人」「遊びを含めていろいろなことを教えてくれる人」と考える保護者が多く、その存在は親子どちらにも重要であることが明らかになった。

(5) プレイスクールは、その遊び内容や遊び仲間が高く評価され、日常では得難い遊び経験を提供するところであると評価されていた。プレイスクールのようなプレイリーダーのいる遊び場が、子どもがひとりで行ける範囲内に設置され、いつでも無料で利用できるようになることを望む意見が多かった。

(6) 一方、次のような問題点も明らかになった。①会員制のため入会できる子どもが限定される。②活動日、活動時間が限定されている。③広域の子どもを対象とせざるを得ず、近隣性に欠ける。④親の送り迎えに依存している。

5. まとめ

プレイリーダーのいる子どもの遊び場として、本研究の調査対象とした[雑創][福岡]の両プレイスクールの成立要件を図8に整理して示す。郊外、都心のいずれの立地においても、子どもがのびのびと自由にそして安全に、多様な遊びを展開することができる遊び場を成立させるためには、“複数”の“専任”プレイリーダーが“常駐”することが特に重要な要件であるといえる。

日本にはプレイリーダーのいる子どもの遊び場の事例が少ないため、本研究では、会員制のプレイスクールを調査対象としたが、遊び場にプレイリーダーという大人が常駐することの重要性が明確になった。しかし、本来、子どもの遊び場は、「いつでも、誰でもが、自由に無料で遊びに行くことができる」ことが必要である。したがって、今後、プレイリーダーのいる遊び場は公的に位置づけられることが主流となるべきである。また、子どもがひとりで行けるためには、身近に設置される必要があり、徒歩圏内、すなわち小学校区単位に設置されることが望まれる。行政の支援を充実させ、地域住民やボランティアを巻き込んで、専任のプレイリーダーが常駐する、地域の特徴を活かした遊び場づくりが進められるべきである。そのためには、プレイリーダーの養成も今後の重要な課題である。

子どもが自由にのびのびと遊べる環境を地域に創出するためには、既存の児童館、図書館、博物館（これらの施設には必ず大人が常駐している）や公園等の公共施設・空間を活用し、これらを拠点として適正にプレイリーダーを配置し、子どもの遊びネットワークを

構築していくことが考えられるが、そのためにはどのような要件が重要であるのかについて今後検討していくことが必要である。

本研究は平成9年度文部省科学研究費（基盤研究C2，代表者：瀬渡章子）を受けて行ったものである。また、本研究は平井由紀（奈良女子大学平成9年卒業）と中澤久美子（同，平成10年卒業）との共同研究により実施した。なお、本研究については日本家政学会第49，50回大会においてその一部を発表した。最後に、本調査にご協力いただいた皆様に感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 大村璋子：『子どもの声はずむまち』，ぎょうせい，東京，155（1994）
- 2) 小笠原浩方：『プレイリーダーノート』，ぱすてる書房，大阪（1997）
- 3) アービッド・ベンソン（大村虔一，大村璋子訳）：『新しい遊び場』，鹿島出版会，東京（1974）
- 4) 梶木典子：子どもの遊び環境に関する空間計画系研究の動向に関する考察—1986～1997—，奈良女子大学人間文化研究科年報，第14号，219-232（1999）
- 5) 岡田英紀，仙田 満：都市化による子どもの遊び環境の変化に関する研究—横浜市における経年比較調査による—，都市計画学会論文集，No.26，61-66（1991）
- 6) 仙田 満，岡田英紀：こどもの遊び環境の構造的変化に関する研究—横浜・山形における経年比較調査による—，都市計画学会論文集，No.28，763-768（1993）
- 7) 仙田 満，三輪律江，岡田英紀，渡辺 拓，矢田努：日本における1975年頃から1995年頃の約20年間におけるこどもの遊び環境の変化の研究，都市計画，211号，73-80（1998）
- 8) 長山宗美：冒険遊び場（羽根木プレーパーク）における利用者の意識について，造園誌，53（5），275-280（1990）
- 9) 長山宗美：冒険遊び場（羽根木プレーパーク）の行動調査からみた利用実態について，造園誌，54（5），347-352（1991）
- 10) 加藤慶子，住谷 浩：子供の遊び場に関する調査研究—札幌市の児童会館について—，日本建築学会梗概集，E，411-412（1991）
- 11) 加藤慶子：子供の生活空間に関する調査研究—児童会館の平面プランと使われ方について—，日本建築学会梗概集，E，435-436（1997）
- 12) 萩原美智子，北浦かほる：小学生にみる児童館利用特性，日本建築学会梗概集，E，395-396（1996）
- 13) 菊池洋之，石川 充，湊谷 浩，小林千恵子：都心部と周辺部の児童館規模・配置計画と現状，日本建築学会梗概集，F，501-504（1996）
- 14) 梶木典子，瀬渡章子：プレイリーダーのいる子どもの遊び場に関する研究—雑創の森プレイスクール（京都府田辺町）の調査事例—，日本建築学会梗概集，F，335-338（1997）